

第3回小笠原諸島ネズミ対策検証委員会 議事要旨

日時：平成27年9月4日（金）9：30～12：10

場所：（内地）環境省関東地方環境事務所会議室

（父島）小笠原村商工観光会館(B シップ)／小笠原村情報センター

出席者：議事概要参照

■委員の意見と対応

（前回までの検証の課題整理と対応状況）

- 前回検証委員会での提言を受けて、兄島陸産貝類保全プロジェクト会議で議論されたベイトステーションを用いた対策内容が示され、影響緩和策として非標的種の監視体制・死亡・衰弱個体発見時対応マニュアルが作成されたことが評価された。

（過去の事業の経緯の検証）

- 事業実施にあたる事前の合意形成が十分でなかったことに加えて、殺鼠剤の洋上流出対策・回収体制が十分でなかった、再侵入か取り残しかのDNA分析が十分でなかったという問題点の指摘があった。

（環境影響評価のための実証試験の進捗状況）

- これまで鳥類への殺鼠剤毒性は低いとされてきたが、ドバトの試験結果より、殺鼠剤の喫食性は低い、摂取した場合の毒性はネズミと同程度の致死性であることを確認。鳥類への毒性の根拠がどのように検討されてきたかを整理しておく必要がある。
- 猛禽類は、解毒酵素が少ないため、影響がより強く出るという報告がある。猛禽類の実証試験は、費用面と個体の入手が難しいため、ネズミ等に蓄積した殺鼠剤の二次毒性の試験結果と海外の猛禽類に関する文献をもとに解析する。
- クジラ・イルカの影響評価は、直接的な試験が困難なため魚の二次毒性（蓄積状況）から予測する。特に哺乳類に殺鼠剤成分は効きやすいため、海外情報も含めて整理する。
- 実証試験により、殺鼠剤の安全性が確認できれば空中散布の再開が考えられるが、その際も海域に流れ出ない対策が必要。
- 非標的種への影響については、個体への影響だけでなく、個体群にどう影響を与えるかを検討するべき。

（検証報告書の骨子案）

- ネズミ対策事業のプロセスで目標設定や計画立案から住民意見を聞く機会をいれていくことを検証委員会として提言する。合意形成のプロセスを踏んで島民と意見を反復交換しなければならないこと、拙速になるとまた同じ失敗につながるが、陸産貝類が絶滅しないようスピーディに、プロジェクトチームと検証委員会で連携取りながら、検証報告書をつくる中で合意していきたい。
- 科学委員会における科学的な助言と、地域連絡会議における連絡調整のもとで事業者としての環

境省、東京都、林野庁が事業を実施する基本的なプロセスがあるが、地域との合意形成が十分に機能していなかった。

- 第1世代抗凝血性殺鼠剤を使ってネズミをコントロールするということは、この先もずっと殺鼠剤を撒き続けることになり、結果として生態系への負荷がより大きく、それよりも根絶する方がはるかに生態系への影響が少ないということを検討すべき。
- 海外では2年間ネズミが再確認されなければ、根絶とみなすとしている。兄島でH21年度の駆除以降、2年以上ネズミが確認されなかったことで、固有の動植物が回復したことから、根絶に成功したという議論を追加すべき。
- 予算内での効率を考えるなかで、小笠原は優先順位をつけられないほど問題が多く、対策を講じるべき島はたくさんあるが、他のことを見過ごした部分があった。早く対策を実施すれば効果が出るものを放っておいたことで平成21年度はできるだけ広い範囲をやろうという判断になったが、科学者としても、優先順位をつけることに怠慢であったと反省しなければならないし、環境省は科学者の言いなりになるのではなく、行政的な判断をすることも必要だった。
- 今後のネズミ対策のあり方として、適材適所で手法を組み合わせることを提言する。以前のプロジェクトでは、空中散布ありきだった。効率性の点から海岸からの流出のリスクを低く見積もってしまったが、実証試験結果から流出のリスクが高いことが分かったので、対策を検討する際の考慮要因として考えてほしいということを、検証内容に入れたい。
- 対策手法の比較に効果（メリット・デメリット）の評価を加える必要がある。
- 無人島の取り組みは保全作業に携わっている人しか知らず、多くの人は状況が理解できないので、地域に分かりやすいかたちで情報共有することで合意形成を進めていく。
- 経緯の検証とともに、農取法上の整理、目標設定そのもの、計画立案における問題、クマネズミの生物学が十分でなかった、全体の流れのどこに問題があったかなど個別について検証し、結果として載せる。
- 報告と提言のターゲットについて、環境省事業に対する検証と今後の事業に対する有益な方法を提言する位置づけとする。将来的には事業を実施する行政機関を含め、検証の成果を広く共有して、今後の事業実施にいかしていく。

■助言者からの意見

- アカガシラカラスバトは無毒餌をよく食べたということが、過去の知見で得られているので再度確認すべき。
- 鳥類は緑色のものを食べにくい傾向があるため、緑色の粒剤の喫食試験をやってはどうか。また、オガサワラオオコウモリは緑色に反応するため、黄色、黒とか鳥類に視認されにくい食べられにくい色の実験が必要。
- 鳥類へのリスクが高いため、非標的種の衰弱個体を積極的に探す監視体制を構築すべき。
- 宮古島の殺鼠剤散布事業で殺鼠剤のフスマによる水系の富栄養化による固有昆虫への影響が懸念されるため宮古島の水道局の水質調査データ等を入手してはどうか。

- トンボヤゴは提供できるため試験を追加してはどうか。
- 小笠原ではウミガメを食べる習慣があるのでクサガメで残留性を調べてほしい。
- オガサワラノスリが減少しているように感じている。ネズミが減ると餌が足りずにノスリの繁殖が減るという二律背反的な点について理論的に整理してほしい。
- 事業全体としては、個体への影響よりも個体群への影響で、どこまで許容されるかという概念で捉えるべき。
- 手法のメリット・デメリットをわかりやすく整理する。
- 報告書の提言として、手法の改良の提言が必要。具体的には、片側のみで空中散布できる手法、GPSのプログラミングにより経路を確実に飛行する、粒剤の防水性を高めるなど、手法の改良によって、空中散布は使える手法であることを提言すべき。
- 米国のように住民とプロセスを共有するといったプロセス論が必要。一般向けにコントロールと絶滅の違いを書いた資料など海外資料を利用すべき。

■傍聴者意見

- 生物間相互作用で蓄積性を見ているなどがわかるような整理をした方がわかりやすい。
- 事業請負者の説明責任が果たされていないと今後もうまくいかない。
- 今後、小笠原のネズミをどうするのが曖昧である。父島の陸産貝類も被害に遭ったし、農業被害も出ているため、根絶なのかはっきりしてほしい。